

“つながり” “居場所” があるということ

社会福祉学部社会福祉学科 2年 梅内 吉子

活動先：NPO 法人 はっぴいわん大府

クラス：松下 典子 先生

1. はじめに

私が今回のサービスマーケティング活動を行った NPO 法人「はっぴいわん大府」は、大府市にある高齢者を中心に地域の方たちと楽しいたまり場を作り、最後まで生きがいを持って「みんなピンピンコロリいけたらいいね」と、そんな仕組みを皆協力し合って支えあっている市民団体だ。3月のバスツアーでここを訪ねさせていただき、利用者さん、職員さんの笑顔、民家で活動しており、そのアットホームな雰囲気の良さがとても印象に残り、ここで活動したいと思ったのがきっかけで活動を希望した。

活動を通して、様々な問題や課題、自分の成長に気づいた。

2. 活動を通して

他の活動先に参加した人たちよりも、バスツアーで現場の雰囲気は分かっていたし、代表者の久保田久代さんにお会いして人柄の良さも伝わっていたので知っている知識は多かったと感じる。8月21日～26日の6日間だったが、とても実りあるものになった。活動を具体的に述べていきたい。

・8月21日：久保田さんのご自宅でバーベキュー

職員さん方がたくさんおり、大府市のことから、自然の知恵、料理の知恵まで様々教えていただいた。またお肉やお魚の天ぷら、畑で収穫された野菜のサラダなどどれも本当においしかった。

・8月22, 24, 26日：はっぴいわん大府での活動

午前中は食事の準備や利用者さんへのお茶・お菓子出し、モップ掛けなどの掃除、午後は、利用者さんと一緒にご飯を食べ、食器の片づけ（食器洗いなど）、ペーパークラフト、折り紙づくり、利用者さんと写真を撮ったりした。

・8月23, 25日：みどり集会所での活動

午前中は、はっぴいわんと同様、食事の準備、盛り付け、おぼん出し、久保田さんの占いをしてもらったりした。午後は、レクリエーションとして東日本大震災のための千羽鶴作り、コーヒを沸かししたり、牛乳パックで小物入れを作った。

そんな充実した6日間の活動を通して学んだことは、まず「地域とのつながり」の重要性だ。人は一人では生きていくことができない。高齢者になれば尚のこと言える。しかし、現在の日本ではそんな人と人とのつながりが地域ならまだしも、日本中が希薄化しており無縁社会とも呼ばれる深刻な状態にある。そこで、はっぴいわん大府では、“つながり”を大切に、「もう一つの家」という“居場所”を作り、最後まで生きがいをもって安心して暮らしていただくことをモットーにしている。毎日おしゃべりを楽しみ、健康にもよい食事をしながら情報交換を行う。たとえ些細なことであっても困っている利用者さんに対して助け

合いの考えが生まれ、解決に向けてみんなで考えるのだと感じた。利用者さんから家族へ、そして地域につながっていくものでもあるのだろう。

また、大府市では1日に介護保険料が800~1,000万円支払われており、とても財源を圧迫していると久保田さんがおっしゃっていた。私たちが高齢者になったとき、よりよい生活を地域でしていくためには、今から“居場所”作りをしなければならないと感じた。居場所作りはすぐに地域に浸透するものではなく、長い年月がかかるという。実際にはっぴいわん大府では活動を始めて5年でようやく多くの利用者が増えてきた。しかし、まだ活動を始めて3年のみどりの家では、利用はしているが、イベント（教室）を受講せずにお昼を食べて帰られる人がほとんどで、利用者も少ない。みどりの家が近隣の人に知られ、受け入れられるようになったのは、最近のこととおっしゃっていたことに驚いた。“居場所”は市民活動の要であり、地域とのつながりが欠かせない。今のうちから自治区に1か所ずつ市民が運営できるように仕組みを変えていくことが必要だと思った。

3. 活動を通しての自分の成長と気づき

この活動で、私は人と関わることに楽しさを感じた。本当にいろんな方がいらっしゃって、はっぴいわんを生きがいとして利用されていることがとても伝わった。料理の仕方、配膳の仕方、利用者さん方とのコミュニケーションの取り方などすべてにおいて成長できた気がするし、今回は大府市だったが、大府市の現状、それによるNPO活動の広まりを知ることができた。はっぴいわんのようにNPO法人ができるのは、ニーズがあるから。ニーズの対象は、高齢者だったり障がい者だったり、子どもだったり、健常者だったり様々だ。お年寄りはもちろん、子どもから若いお母さん方にも参加できるように、今から活動を次期の国を担う私たち若者が広めていかなければならないと感じた。誰もが自由に利用できる“居場所”作り。それは、今後地域の中で人々が“つながり”合う役割を果たすものになるだろう。

